様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０００１

研究課題名（和文）現象学の媒介論的展開――フッサールと田辺元の哲学を手引きとして――

研究課題名（英文）Mediation-theoretical development of phenomenology on the basis of Husserl's and Tanabe Hajime's philosophy

研究代表者
田口　茂（TAGUCHI, Shigeru）

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：５０２８７９５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：田辺元の哲学に触発された「媒介」の概念を、フッサールの現象学的分析に適用することによって、現象学的分析を単なる客観主義からも主観主義からも解放し、むしろ「媒介」という出来事から出発して主観的経験と客観的事象との相関を考えることができるということを具体的に示した。とりわけ、本質、時間意識、間主観性を媒介論的に解釈しえたことが重要な成果である。こうした成果を生かして神経科学者や数学者との共同研究を行った。

研究成果の概要（英文）：By using the concept of "mediation" inspired by Tanabe Hajime's philosophy, phenomenological analyses initiated by Husserl can be liberated from mere objectivism and subjectivism. The correlation between subjective experience and objective entity can be addressed through the phenomenon of "mediation." An important result is to have shown that essence, time-consciousness, and intersubjectivity can be redefined on the basis of the concept of mediation. This result was applied to my joint research with neuroscientists and a mathematician.

研究分野：哲学

キーワード：現象学　フッサール　田辺元　媒介　国際共同研究　学際研究　自我　間主観性

１．研究開始当初の背景

フッサール現象学の事象分析、とりわけその犀利かつ精密な分析力は、哲学分野のみならず諸科学との交差領域においても様々な影響力を及ぼしてきた。近年、認知科学や臨床科学の分野における研究の活発な進展に伴って、現象学があらためて注目されるに至っているが（*Phenomenology and the Cognitive Sciences* や *Journal of Consciousness Studies* 所収の諸論文などを参照）、現象学が立脚する「現実」概念の特異性（日常的・自然的見方との差異）ゆえに、その解釈をめぐってしばしば混乱が生じていることは否めない。とりわけ、現象学的記述を単なる「主観的」「内観的」記述と見なし、「客観的」記述から分断されたものと見なすならば、現象学的分析の成果が「内界と外界」といった不毛な対立図式に押し込められてしまう。このような問題を払拭し、現象学的分析を科学的研究とより実質的に接合するためには、現象学的記述の言語そのものを主観主義的な偏向から解放し、主観的なものと客観的なものとがまさしく差異において立ち現われてくる現場へと思考を媒介する語り方の工夫が必要となってくるのである。

研究代表者は、物理学者・数学者との共同研究を行うなかで、上記のような現象学の改鋳の必要性を強く感じるに至った。他方、研究代表者は、日本の哲学者・田辺元の「絶対媒介」の哲学に以前から注目してきたが、彼によって用いられている媒介論的な思考方法を現象学に適用するならば、上で述べた問題意識に対応する現象学的思考の転換が図れるのではないか、という着想に至った。以上が本研究開始時における背景である。

２．研究の目的

本研究は、田辺元における「絶対媒介」の思想を参照しつつ、「媒介」という発想を現象学の記述・分析に適用すること、それによって現象学を一方的な観念論的解釈から解放し、諸科学との共同作業をより容易にすることを目的としている。

フッサールの言う「明証」は、客観的に存立する「真理」から明確に区別されると同時に、単に主観的な体験の側に一方的に位置づけられるわけでもない。「真理」がわれわれに現われるという事態は、そのような主客の分断に先立つものであり、そのような事態こそ「明証」の名で呼ばれる。「主観的なもの」と「客観的なもの」とが区別されるということの根拠も、この「明証」という事態の内にある。この意味で「明証」にはまさに田辺元が言う「媒介」の性格、すなわち差異化しつつ繋ぐという働きが見てとれる。そしてここにおいて、フッサールが「明証」に基づいて規定する「現実」の性格と、田辺が「媒介」に見てとる「現実」の性格とが重なるのである。この点を最も基本的な洞察として、本研究は以下の三つのテーマを扱う。

(1) <u>明証と現実</u>　上記のような基本的洞察をさらに深めることによって、「現実」の概念を、主体的なものと客体的なものとの媒介として再解釈する。そこから出発して、通常単に対比的に捉えられる主観性と客観性を媒介論的に再解釈する。

(2) <u>時間性と同一性の構成</u>　田辺による「時間性」の媒介論的解釈を参照して、現象学的時間論の再定式化を図る。過去と未来とが切断されつつ結合されるという「転換・媒介」として現在を解釈し、この点を、現象学において多様な局面とレベルで分析される「同一性の構成」の解釈に一貫して適用する。とりわけ事物の構成、理念的対象（本質）の構成、自我の自己構成という三つの局面において媒介論的解釈を徹底し、現象学的構成論から実体化的固定化を徹底して斥ける。

(3) <u>間主観性</u>　上記二つの研究を基盤として、諸主体の「間主観的」関係を非実体論的・媒介論的に再解釈する。間主観性を単に「事実」として前提するならば、その構造を明らかにすることはできない。その構造を明らかにするために、間主観性を個人へと分解して再び組み直そうとしても、やはり依然として前提された間主観性をどこかで密輸入しないかぎり、生きた間主観性に至ることは不可能だろう。このような思考停止状態を打破するために、媒介論的分析を導入するならば、個人をも間主観性をも固定的な出発点として前提せずに、媒介的出来事そのものの契機としてそれらを分析することが可能になる。

３．研究の方法

(1) フッサール現象学および田辺哲学のテキストに即した具体的な解釈の作業を行った。まず田辺哲学の体系的研究を中心に進め、その成果を生かしつつフッサール現象学の諸概念の媒介論的解釈を行い、テキストに即してそのメリット・デメリットを具体的に検討した。

田辺哲学のテキスト的研究に関しては、中期田辺哲学の「種の論理」関連論考（全集六・七巻）の検討を進め、「絶対媒介」の概念の特性と射程、この時期の解釈の問題点を検討した。次いで、中期思想の問題点を批判的に克服したとされる「懺悔道」期の基本思想、とりわけ「理性の絶対批判」を詳細に検討し（全集九巻ほか）、「絶対媒介」概念の行為的・実践的解釈がいかに深化・徹底されたのかを明らかにすることを試みた。さらに、前期から後期に至る各年代のテキストから、時間論に関する論述を取り上げ、踏み込んだ分析を行った。

上記の作業と一部平行しつつ、フッサールの「明証」、「現実」および「間主観性」概念の媒介論的解釈を、フッサールのテキストに即して進めた。フッサール全集 *Husserliana* Bd. I, II, III/1-2, VIII, XI, XIII-XV, XXXV, XXXVI; *Erfahrung und Urteil*, Hamburg 1972 などを主な検討の材料とし、さらに研究代表者が以前

の科研費研究によって行ったフッサール未公開草稿の研究資料から、明証論関係の重要資料（AI 31 等）を用いて具体的な検討を行った。「明証」概念については田辺の「絶対媒介」概念の研究と関連づけ、「間主観性」概念については「還相」概念と、「現実」概念に関しては田辺哲学の行為的・実践的志向と関連づけて検討を進めた。

さらに、田辺哲学の「媒介」概念を参照しつつ、現象学全般の媒介論的再解釈を行った。事物的対象、本質、類型、自我、間主観性などの主要トピックについて、媒介論的な分析による再定式化を進めた。

(2) 上記のようなテキスト研究の成果を元に、国内外における各分野・各トピックの専門研究者との対話・討議を行うことにより、解釈の成果を吟味し、修正・深化した。①個別の対話（インターネット［スカイプ］や学会等を利用した個別の討議）、②小規模な研究会の開催、③ワークショップ・シンポジウム形式での集中的な討議という三つの形式を用いた。

①に関しては西郷甲矢人氏（数学）、ピート・ハット氏（物理学・学際研究）、土谷尚嗣氏（神経科学）、金井良太氏（神経科学）、山田真希子氏（神経科学・心理学）との対話・討議を通じて、共同研究を行った。②に関しては、北海道大学で、Andrea Altobrando 氏（現象学）と協力しつつ、Phenomenology and Japanese Philosophy という研究会を立ち上げ、定期的に会合を行った。③に関しては、以前から協力関係にある板橋勇仁氏、竹花洋佑氏、杉村靖彦氏、廖欽彬氏、宮野真生子氏といった日本哲学研究者と、「田辺哲学シンポジウム」を立ち上げ、毎年一回研究会を開催した。また、本研究の成果を多角的に検討するため、国内外から様々な研究者を招いて講演会・ワークショップを行った。

４．研究成果

(1) 田辺哲学のテキスト研究に関しては、中期哲学の「種の論理」関連論考を精査し、とりわけその中心課題としての社会存在論、その帰結としての国家論について、その詳細な構造を明らかにすることができた。田辺は、「種の論理」を通して、全体主義をも個人主義をも批判しうるような社会存在論の構築を目指しているが、類・種・個の媒介関係によって成り立つ社会の構造の要を成すのが、「国家」であると目されている。そこにおいては、「自己否定態」としての種の解釈、「自己疎外」としての種の直接性の解釈、種の二重対立性の分析など、田辺の媒介思想の深まりが大きく寄与していることが明らかになった。そのような田辺の国家論は、やがて挫折するに至るが、そこでは、前期から田辺哲学を規定する「悪」の媒介性が忘却されたことが一つの要因と考えられる。「悪」の媒介性への取り組みの変遷を手がかりとすることによって、田辺の「種の論理」の展開と変容について解釈することが可能であるということが明らかとなった。「悪」の問題との取り組みは、田辺哲学を後期の「懺悔道」哲学へと転回させるに至る。この懺悔道哲学における「絶対媒介」の思想の徹底を詳細に分析し、「悪がまさに悪であるままで救済の媒介となる」という悪の媒介性の思想の徹底した帰結を明らかにした。以上の成果は、『思想』（岩波書店）誌に連載の形で発表した（雑誌論文③⑨、「懺悔道」哲学については未発表だが、掲載は決定している）。

田辺哲学に関しては、さらに様々なテキストに即して「時間論」の検討を行った。田辺の時間論は、「循環」と「渦流」というイメージを用いつつ、円環的な構造として描かれる。さらに田辺は、その構造の中核を成す「現在」をある種の「切断」として、あるいは「時間の裂け目」として解釈する。こうした時間論は、後期の『懺悔道としての哲学』において、懺悔の時間性の解釈へと結実していく。そこでは、未来と過去が現在において転換相入するといった多次元的な媒介構造が描き出されている。こうした時間の媒介構造については、『日本の哲学』第 16 号などに発表した（雑誌論文④）。

(2) フッサールの「明証」概念の研究については、田辺哲学を参照しつつ、フッサールのいう「明証」を、ある種の「行き止まり」としてではなく、複数の局面の「間」に現われる転換点・回転軸・跳躍台として解釈した。すなわち「明証」とは、固定的に確保されうるものではなく、むしろ「媒介」が首尾よく果たされたということを意味する。この研究成果は、同志社大学で行われた日仏共同コロキウムで発表した（学会発表⑬）。また、「明証」として現われる現象の様々な同一的契機に関しても、それらを媒介の多様な諸形態として再解釈することが可能であることがわかった。

この研究を推し進めることによって、現象学の様々な主要トピック、すなわち事物的対象、本質（理念的対象）、類型、自我、間主観性などを、それぞれ具体的に媒介論的な仕方で再解釈することができた。これにより、現象学全体の媒介論的展開がかなりの程度まで推し進められうるという見通しが得られた。この方向での研究成果は、ハイデガー・フォーラムで発表し、同学会誌に掲載された論文や、著書『現象学という思考――〈自明なもの〉の知へ』（筑摩書房）として出版した（図書④）。

フッサールのモナド論、原自我論についても、媒介論的な再解釈を進めることができ、その成果を日仏哲学会の学会誌『フランス哲学・思想研究』に発表した（雑誌論文⑥）。

(3) 上記のようなテキスト研究の成果を基盤として、様々な共同研究を行うことができた。まず第一に、以前から進めていた西郷甲矢人氏（数学）、ピート・ハット氏（物理学、学際研究）との学際的な共同研究をさらに継

続し、西郷氏とは、現象学と量子物理学・数学を通して現代における現実概念の転換について論じた二本の共著論文をほぼ仕上げることができた。この論文には、田辺哲学研究とそれに触発された現象学の再解釈が大いに役に立った。これらは現在出版準備中である。

2015 年 8 月には、ピート・ハット氏の発案により、神戸大学で三週間のサマースクールが行われ、意識の科学的・現象学的研究について集中的な討議が行われた。これに参加した西郷氏と筆者は、土谷尚嗣氏（神経科学）と、意識の理論をめぐって、統合情報理論と圏論、現象学の交差領域をめぐる集中的な討議を行った。この共同研究の成果は、Neuroscience Research 誌に投稿され、掲載が決定している（雑誌論文①、in press として Web 上に公開済み）。土谷氏、西郷氏との共同研究には、さらに金井良太氏（神経科学）、山田真希子氏（神経科学、心理学）も加わり、時間と自己をめぐる学際的研究として継続中である。

(4) 北海道大学に日本学術振興会外国人特別研究員として所属した Andrea Altobrando 氏とも、現象学、とりわけ「自己」の概念をめぐる共同研究を行った。同氏は日本哲学の研究も行っており、現象学と日本哲学との公差領域について、集中的な討議を行った。その主な場として、Phenomenology and Japanese Philosophy という英語による discussion group を定期的に開催し、本研究の一環としてのテキスト研究の成果についても、多角的に検討することができた。また、同氏と共同で複数のワークショップ、研究会を行ったほか、イタリア・パドヴァ大学での招待講演（学会発表⑪）・研究交流も実現した。これらの機会に、現象学の媒介論的再解釈に関する研究代表者の試みを、ヘーゲルとドイツ観念論をはじめとする様々な角度から再検討することができた。

(5) 2013 年に北海道大学で、日本哲学の複数の研究者と「田辺哲学シンポジウム」を立ち上げ、田辺哲学に関する集中的な討議を行った。田辺哲学については、これまであまり多くの研究がなされておらず、研究成果を討議する場もほとんどなかった。本シンポジウムは、田辺哲学の研究者が一堂に会して田辺哲学について集中的に議論するはじめての場となった。第一回シンポジウムは成功を収め、以後、2014 年（第二回、北海道大学）、2015 年（第三回、福岡大学）と、毎年開催され、若手研究者を交えて、集中的な討議と共同研究を継続している。このシンポジウムにおいて、研究代表者は毎年本研究の成果の一部を発表し、田辺哲学研究者による綿密な批判的検討により、その内容を吟味・修正・改善することができた（学会発表③⑨⑯）。本シンポジウムは、今後も継続する予定である。

(6) 2015 年 10 月にコペンハーゲン大学教授・主観性研究センター所長のダン・ザハヴィ氏を招聘し、講演会を開催したほか、ワークショップを行い、自己と間主観性に関する集中的な討議を行った。とりわけ「ミニマルな自己」の概念、心理学などの成果をも含めた Einfühlung（empathy）論の解釈、間主観性と他者の現象学的解釈をめぐって、様々な意見交換・討論が行われた。これらの討議を通じて、本研究の媒介論的解釈の成果についても、あらためて批判的に検討することができた。

2015 年 11 月には北京大学教授ライナー・シェーファー氏を招聘し、講演会・研究討論を行った。同氏とはとりわけヘーゲルの論理学における否定性と弁証法に関して討議を行ったほか、ドイツ観念論とその媒介思想全般について討議を行った。これにより、本研究における現象学的媒介論の成果を歴史的文脈の中に位置づけ、その意義やポテンシャルについて検討することができた。

2016 年 2 月にはメキシコ国立自治大学准教授トム・フレーゼ氏を招聘し、連続講演会・研究討論を行った。同氏とはエナクティヴ・アプローチをはじめとする認知科学について集中的に討議した。同氏は、本研究の成果であるいくつかの論考を綿密に検討した上で、本研究の展開について有益な示唆を与えてくれた。その討議の成果も踏まえつつ、国際的学術誌 *Constructivist Foundations* の特集号（Froese 氏も共同編集者となっている）に、エナクティヴィズムに関する open peer commentary を発表することができた（雑誌論文②）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① 土谷尚嗣、田口　茂、西郷甲矢人, Using category theory to assess the relationship between consciousness and integrated information theory, *Neuroscience Research,* 査読あり, in press.
DOI: 10.1016/j.neures.2015.12.007
http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0168010215002989

② Shigeru Taguchi, Can the Lived Experience of Living Beings Be Approached through Inference?, *Constructivist Foundations*, 査読あり, Vol.11, No.2, 2016, pp.215-216.
http://www.univie.ac.at/constructivism/journal//11/2/215

③ 田口　茂, 田辺元――媒介の哲学：第三章　国家論の挫折と理性の運命,『思想』, 査読無し, 第 1102 号, 2016, pp.80-103.

④ 田口　茂, 時の逆流について――田辺哲学における時間の媒介構造,『日本の哲学』, 査読無し, 第 16 号, 2015, pp.46-62.

⑤ 田口　茂, 非コンテクスト的自己――フッサールの「原自我」と西田幾多郎の「自己」概念, 『情況』, 査読無し, 2015 年 8 月号, 2015, pp.140-157.

⑥ 田口　茂, フッサールのモナドロジーと原自我の思想, 『フランス哲学・思想研究』, 査読無し, 第 20 号, 2015, pp.29-43.

⑦ 田口　茂, Non-being Self as Mediator in Tanabe Hajime's Philosophy, *Taiwan Journal of East Asian Studies*, 査読あり, Vol.12, No.1, 2015, pp.25-40.
DOI: 10.6163/tjeas.2015.12(1)25

⑧ 田口　茂, 媒介論的現象学の構想――フッサールと共に、フッサールを超えて, 『ハイデガー・フォーラム』, 査読無し, 第 9 号, 2015, pp.37-48.
http://heideggerforum.main.jp/ej9data/taguchi.pdf

⑨ 田口　茂, 田辺元――媒介の哲学　第二章　国家論の射程と「種の論理」の展開, 『思想』, 査読無し, 第 1089 号, 2014, pp.103-124.

⑩ 田口　茂, 悪の媒介性と直観の方法的機能――シェリングと田辺の「間」, 『シェリング年報』, 査読無し, 第 21 号, 2013, pp.15-24.

〔学会発表〕（計 22 件）

① 田口　茂, モナド論と原事実――『間主観性の現象学』に含まれる一つの筋道, 第 14 回フッサール研究会, 2016 年 3 月 11 日, 立命館大学（京都府京都市）

② 田口　茂, 西田幾多郎の自由意志論―自由と悪の問題をめぐって, 科研費基盤研究（C）「現代における自由意志の問題」研究会, 2016 年 2 月 27 日, 立正大学（東京都品川区）

③ 田口　茂, 懺悔道と悪の弁証法, 第三回田辺哲学シンポジウム, 2015 年 8 月 29 日, 福岡大学（福岡県福岡市）

④ 田口　茂, 内は外であり、外は内である――フッサール・西田・田辺, 現象学の異境的展開オープニングシンポジウム「現象学にとって異境とは何か？」, 2015 年 7 月 4 日, 明治大学（東京都杉並区）

⑤ Shigeru Taguchi, The Self Prior to Discreteness: Husserl's "Primal I" and Nishida's "Self", 現代性語境中的翻譯與詮釋――中日哲學界的對話, 2015 年 5 月 23 日, 上海（中国）

⑥ Shigeru Taguchi, Non-Contextual Self: Husserl and Nishida on the Original Experience of the Self, International Conference "Self and (Its) Realization(s)", 2015 年 5 月 10 日, 北海道大学（北海道札幌市）

⑦ 田口　茂, 媒介論的現象学の構想, ハイデガー・フォーラム第九回大会, 2014 年 9 月 20 日, 東洋大学（東京都文京区）

⑧ 田口　茂, フッサールのモナドロジーと原自我の思想, 日仏哲学会 2014 年秋期研究大会シンポジウム, 2014 年 9 月 13 日, 東京大学（東京都目黒区）

⑨ 田口　茂, 田辺の国家論の基本構想とその問題点, 第二回田辺哲学シンポジウム, 2014 年 8 月 28 日, 北海道大学（北海道札幌市）

⑩ 田口　茂, 時の逆流について――田辺哲学における時間の媒介構造, 日本哲学史フォーラム, 2014 年 7 月 26 日, 京都大学（京都府京都市）

⑪ Shigeru Taguchi, Reality as it is: Nishida and Tanabe on Appearance and Mediation, Lecture, 2014 年 6 月 19 日, パドヴァ（イタリア）

⑫ Shigeru Taguchi, Unentrinnbare Erfahrung. Evidenz und Wirklichkeit bei Husserl und Levinas, Das Philosophische Colloquium, 2014 年 6 月 16 日, ヴッパータール（ドイツ）

⑬ 田口　茂, 媒介としての明証――フッサール現象学と田辺元を手引きとして, 西洋哲学と日本思想の対話, 2013 年 12 月 14 日, 同志社大学（京都府京都市）

⑭ Shigeru Taguchi, Self as Nothingness and Mediation in Tanabe Hajime, Self and Person in East Asian Perspective　2013 年 11 月 29 日, 台北（台湾）

⑮ Shigeru Taguchi, 謝林與田邊元：關於「惡」的哲學的直觀與媒介的方法, 中国文哲研究所・学術座談会, 2013 年 11 月 28 日, 台北（台湾）

⑯ 田口　茂, 田辺元の「種の論理」と国家論の行方, 第一回田辺哲学シンポジウム, 2013 年 9 月 28 日, 北海道大学（北海道札幌市）

⑰ 田口　茂, 希望のアナクロニズム――田辺哲学における「還相」の時間的構造, 土井道子記念京都哲学基金主催平成 25 年

度シンポジウム, 2013 年 9 月 9 日, 京都ガーデンパレス（京都府京都市）

⑱ 田口　茂, 田辺哲学における国家論の帰趨――「還相」概念を中心として, 東北大学哲学・倫理学合同研究室主催講演会, 2013 年 7 月 24 日, 東北大学（宮城県仙台市）

⑲ 田口　茂, 田辺哲学の転回と「還相」概念, 北海道大学哲学会研究発表会, 2013 年 7 月 13 日, 北海道大学（北海道札幌市）

⑳ Shigeru Taguchi, Evidence as Medium: A Phenomenological Interpretation of Certainty, 11th Annual Conference of the Nordic Society for Phenomenology, 2013 年 4 月 20 日, コペンハーゲン（デンマーク）

〔図書〕（計 5 件）

① 蔡振豐, 張政遠, 林永強（編）, 田口　茂, 他（著）, 国立台湾大学出版中心, 『東亞傳統與現代哲學中的自我與個人』, 2015 年, pp. 173-185

② 小熊正久, 清塚邦彦（編）, 田口　茂, 他（著）, 東信堂, 『画像と知覚の哲学』, 2015 年, pp. 22-48

③ 田山忠行（編）, 田口　茂, 他（著）, 北海道大学出版会, 『時を編む人間――人文科学の時間論』, 2015 年, pp.179-215.

④ 田口　茂, 筑摩書房, 『現象学という思考――〈自明なもの〉の知へ』, 2014 年, 255

⑤ Shunzo Majima, Emanuel-Mihail Socaciu (eds.), Shigeru Taguchi, editura universităţii din bucureşti, *Filosofia Japoneză azi*, 2013 年, pp. 43-60

６．研究組織

(1)研究代表者

田口　茂（TAGUCHI, Shigeru）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：５０２８７９５０

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者

西郷　甲矢人（SAIGO, Hayato）
長浜バイオ大学・講師

ピート・ハット（HUT, Piet）
プリンストン高等研究所・教授

土谷　尚嗣（TSUCHIYA, Naotsugu）
モナシュ大学・准教授